黄昏の家

尹興吉

訳■安宇植

黄昏の家

尹興吉

訳■安宇植

尹興吉（ユンフンキル）

一九四二年、全羅北道井邑に生れる。円光大学国文科卒。一九六八年、「韓国日報新春文芸」に、「灰色の晃旒冠の季節」が当選、デビューする。著書に『黄昏の家』、『九足の靴で居残った男』、『黙示の海』（長篇小説）、『虹はいつ掛かるか』がある。

黄昏の家

昭和五十五年三月二十日　初版印刷
昭和五十五年三月二十五日　初版発行

著者　尹興吉
訳者　安宇植
発行者　真野義人
発行所　東京新聞出版局
東京都港区港南二ノ三ノ一三
中日新聞東京本社
振替口座（東京）五―五四九七
電話　〇三―四七一―二二一一（代表）
〇三―四七二―四四三四（直通）

印刷・製本　大日本印刷株式会社

©1980

目次

黄昏の家　5
記憶のなかの野の花　45
虹はいつ掛かるか　75
家　125
それは刃　163
窮状半生　191

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黄昏の家

装幀＝田村義也

黄昏の家

いまにも道路を横切ろうとしたとたんに、角の向こうの陰に隠れたあたりで警笛がけたたましく鳴りだしたものだから、ぼくは握っていた女の子の手を大急ぎで放してしまった。稲の束を山のように積んでのろのろとやって来た一台の牛車が、やっと道路の脇へ寄るのを待ちかねていたように、ヘッド・ライトをオレンジ色に光らせた軍用トラックの列が疾走して来た。牛車の尻に従いてまわり、路上にこぼれ落ちる稲の粒をついばんでいた一群のひよこが、小さな羽根をばたばたさせながら四方へ逃げ散った。内蔵山一帯に潜む共匪（パルチザン）との戦闘を終えて、討伐隊が帰って来るところだった。

ぼくらはほどなく、雲のような砂ぼこりに巻きこまれてしまった。砂ぼこりを巻き起こすつむじ風と砂ぼこりの中で、ぼくは眼を細く開けて、トラックの荷台の兵士たちに向かって高々と手を振った。ところが兵士たちのほうは、まだ眠りからすっかり覚めやらないかのように、焦点の定まらない視線をちらりとくれただけでぼくの歓迎には何の反応も示さなかった。ヘルメットと肩に依然として木の葉や枝のカモフラージュをつけたままの、兵士たち全員の顔はい

ちょうに黄色っぽく砂ぼこりに覆われていた。額に幾重にも繃帯を巻きつけた顔が一つ、ちらりと眼に映った。ぼくを認めるやとたんに眉をひそめ、にわかに口許をひきつらせたようにした。その兵士の奇妙にゆがんだ表情がぼくの歓迎にたいする返礼の精一杯の表現だったことに、ぼくはいっとき間をおいてから気がついた。渋い微笑を載せたその軍用トラックはすでに、砂ぼこりの彼方に吸いこまれて見えなかった。それにつづく軍用トラックがぼくらの目前を通過するところだった。ぼくは手を振りかけてふと隣りに眼をやった。女の子は手を振っていなかった。女の子はもう我慢がならぬというように、うんざりした顔つきでトラックの行列が通過してくれるのを待ちわびていた。垢まみれの手で、蜂蜜がいっぱいつまった小瓶を後生大事に抱えたままだった。その蜂蜜の小瓶はついいましがたぼくが、母に気取られぬようこっそりと台所の水屋からもちだして来たものだった。兵士たちに向かって京珠がすぐさま手を振ろうとしない理由は、幾らかは蜂蜜入りのその小瓶のせいだった。けれども、両手をどちらも遊ばせているようなときでさえ、女の子がジェムシー（G.M.C.ぼくらは軍用トラックをそんな具合に呼んでいた）に向かって手を振る様子を、ぼくはいっぺんだって見かけたことはなかった。やがてジェムシーの行列が跡絶え、あらゆるものが砂ぼこりの中から元の姿を取り戻していった。道路の脇で休息を取っていた牛車ががたがた音を立てながら動きだすのをまって、ぼくたちもふたたび手を取り合って道路を横切った。

路上にはひよこが一羽押し潰されていた。白味がかった黄色い羽根のうえを横切って通過す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

るトラックが押しつけた、ずっしりと重いタイヤの跡がなおくっきりと残っていた。ぺしゃんこに押し潰された腹部からは、故意にえぐりだしたように腹わたがそっくりそのままはみでていた。女の子は足を止め、ひよこの屍体めがけてぺっと唾を吐いた。

幹線道路を間にはさんで、ぼくの家とほぼ向かい合うようにして建てられているそのレンガ造りの建物は、枯れた蔦かずらに覆われていて、見ようによってはちょうど古ぼけた網をかぶせたように見えた。ぼくらはいつだって、午後の時間のほとんどをその建物の中で過ごした。もっぱらぼくらの遊び場になったのは、鉄を熱するために設けられた巨大な火床だった。その上にあがって立ち、顔を上げると、鉄などを引き上げる錆ついた滑車や三、四重になっているチェーンを重く垂らしたがっしりした梁が、それよりさらに奥のほうには蜘蛛の巣が見苦しく張りめぐらされた巨大な三角帽の形をした天井が、ずっと高いところに眺められた。屋根のど真ん中をくり抜いてつけたガラス窓からは一筋の四角い光線が、あたかも闇の中に高くそびえ立つ燦然たる光の柱のように射しこんできて、虚空に漂うおびただしいほこりの微粒子をいちいち明るく浮き上がらせていた。火床のいちばん縁に覚束ない格好で腰を掛けて、女の子は爛れて漿液の滲む口の両端にしきりと蜂蜜を塗りたくっていた。ぼくはすぐ隣りに腰を降ろし、いよいよ減っていく瓶の中の蜂蜜をはらはらしながら見守っていた。それは母には内緒で、瓶ごともちだして来たものだった。はじめのうちこそ女の子もその点を幾らか考慮に入れてくれているようだったが、いっぺん味をしめてからはぼくの気持ちなどすっかり無視してしまって

いた。薬として塗るべき蜂蜜をそんなふうに舐めてばかりいたのでは、治るおできもなかなかよくはならないとそれとなく注意したが、女の子が瓶を戻してくれたのは中身が半分ほどに減ってしまってからだった。

「ほら、あそこに渡してある太い梁が見えるだろう」

女の子は長い鞭を振り上げて頭上をさした。

「あの梁に大きいお姉ちゃんが首をくくって死んだんだ」

女の子は振り上げた鞭で眼の前のチェーンを思い切り強く殴りつけた。その女の子のもっともよくない癖の一つだった。それだものでぼくは、女の子が語って聞かせる陰惨な物語と、ぼくらの頭上で時計の振り子のようにゆっくりと左右に揺れながら、チェーンとチェーンとが互いにぶつかり合って立てる鋭い金属音とを、同時に聞くことが多かった。またそんなときは決まって、あんずでも噛んだように虫に食われている奥歯がしくしく痛みだし、柔順しく腰を掛けていることができなかった。

「おっ母さんと夜っぴいて言い争ったあげく、家をでて行ったんだ。それが、朝になって見たら、ほら、あそこのあの梁に首をくくっているじゃないか。舌をこんなふうにだらりと垂らしたきり、ゆらりゆらりと……」

女の子はぼくの肘をつついてくすくす笑った。女の子の話を聞いてやる仕事はぼくにとってたいへんな苦痛だった。この娘ときたら、どういうつもりで毎日のように首を吊って死んだ姉

さんのことばかり話題にしたがるのだろうか。気が滅入りそうになる姉さんの死にざまをもう何度も聞かされたことなど忘れてしまったように、京珠はまるで初対面の相手についいましがた仕入れてきた噂でも伝える口調でぺらぺら喋っては、けろりとして自分だけではしゃぎまわるのだった。はじめてその話を聞かされてからの数日間は、たびたび恐ろしい夢を見てはうなされ、自分の頭があるべきところに無事についているかどうかを、ぼくは頭に手をやって確かめてみなければ気持ちがやすまらなかった。人間が自分の手で自分の息の根を絶つという事実からして、当時のぼくにはとうてい想像もつかぬことだった。強靱なロープがか細い首筋にぐいぐい食いこんでいったとき、京珠の姉さんはどんなに痛い思いをしたろうか。ぼくは誰彼を問わず、お願いだから柔かいロープを使って欲しいと勧めたい気持ちだった。ところが京珠ときたら、憎たらしいことに、大きい姉さんの死にざまをさらに微に入り細に入って説明したうえ、ふだんよりは倍を越えるうんこを垂れ流したことまでしゃあしゃあと言ってのけるのだった。そんな話はきょうはじめて聞かされたわけではないことを想い起こさせてやろうと、ぼくは心に固く決心した。すると女の子は、またしてもチェーンに鞭をくれた。やっと幾らか鎮まったと思われたチェーンの音が恐ろしい音をたてて息を吹き返し、金切り声をあげた。と同時にぼくは、左の頬っぺたをふくらませて舌の先で虫歯を押さえ、じっと我慢をつづけるよりほかはなかった。

「ほんとに大騒ぎだったんだよ。そりゃもうたいへんだったんだから。大勢の人たちが駆けつ

けてお姉ちゃんが死んだとわめくやら、銅鑼を鳴らして近所に触れてまわるやらで……それなのにうちのおっ母さんたら、怖くて外へでて来れなかったんだ。身動きすらできなくて居間に籠ったきりだったんだけど、近所の人たちがお姉ちゃんを山へ葬って降りて来たら、そのときになっておいおい泣きだしてね。夜どおし泣いて、次の日は暗くなるまで泣いて……」

お願いだからその話はそのくらいにして欲しいと頼む代わりに、ぼくはごくんと唾を飲みこんだ。

「双子(ふたご)のおじさんがね。いけない、あんたはおじさんを知らなかったわね。そのおじさんはね、あんたがここへ引っ越して来る前にこの……」

鉄工所を経営していた人物だが、京珠が話題にしているのはその双子兄弟の弟のほうだった。いっぺんも顔を合わせたことはなかったが、京珠からすでにたびたび話に聞いていたから、その人物についてぼくはとても詳しく知っていた。兄と弟とで鍛冶屋の仕事をしていたが、兄のほうははやくから軍隊に入って戦死し、しまいには弟一人でハンマーを握るようになった。彼は毎晩のように、酒幕(場末などにあるひなびた居酒屋)を営んでいる京珠の家で酒を飲んだ。そしてその夜も、酔ったあまり京珠の姉さんが火床の上にあがったことも気づかずに、正体なく眠りこんでしまったのだ。山の共同墓地で棺を埋葬する穴を掘る作業を手伝うときでさえ、体からぷんぷん酒の匂いをさせていたほどだった。ところが、京珠の姉さんが首を吊ってからほどなく、斧を鍛える作業中に誤ってくるぶしをハンマーで叩いて不具になり、そのうえさらに、間もな

く鉄工所から出火して財産のほとんどを灰にしてしまってから、何処へとも行方も告げずに立ち去り……。そんなことがあってこのレンガ造りの建物は、空き家のまま残されたのだ。
「この鉄工所は厄病神に取りつかれているんだって。双子のおじさんがそういってたんだ。あんた厄病神って何だか知ってる。知らないでしょう」
ぼくがかぶりを振るのを見て、女の子はいよいよ図に乗って来た。
「それはだね、厄病神っていうのはね、便所で使う箒に人間の血がべったりついて生まれたお化けなの」
説明を終えてから女の子は、勢いづいて鞭を振りあげた。チェーンが時計の振り子のように揺れながら、いかにも痛そうに悲鳴をあげた。京珠に記憶力の悪さを想い起こさせてやるチャンスを、ぼくはまたしても逸してしまった。
「大きいお姉ちゃんたら、とても可哀相なんだ。おとなの人たちがそういってたけど、お姉ちゃんはおっ母さんのせいで死んだんだって。おっ母さんが殺したもおなじなんだってさ。来る日も来る日も酒びたりになって、泣いてばかりいるもんだから、お姉ちゃんたら、おっ母さんを殺そうとしたんだ。けど、おっ母さんを殺すことはできないから、お姉ちゃんのほうが自分から死んだの。あたいだってときどき、おっ母さんを殺してやりたいと思うことがあるんだ。ときどきそうなの。あたい、いつかきっとおっ母さんを殺すかもしれないよ」
陽の射しこまない暗がりの中でぎらぎらする京珠の二つの眼は、ぼくを恐ろしさに震え上が

らせた。京珠が自分のおっ母さんを殺せるだろうということを、ぼくはちっとも疑わなかった。京珠は十分にそれをやってのけることができる娘だった。いつかも京珠は、鼠を生け捕りにしてその背中にガソリンを振りかけ、火をつけたことがあった。そのとき鼠は火達磨になって、あっちへ跳びこっちへ跳びしたあげく口をあんぐり開けたままじきに死んでしまった。京珠は眼を大きく見開いて、鼠が生きようともがくほんの束の間を見守っていたが、やがてこう叫んだ。

「たったのそれっぽっちしか先へ歩けないのかい。あたいは少なくとも五歩ぐらいは歩くと思ったのに」

それだけではなかった。雀を生かしたまま羽根をすっかりむしり取ったことがあった。京珠は丸裸になった雀の片方の翼と二本の脚をぽきぽき折っておきながら、馬鹿みたいに逃げだすことも知らないと足を踏み鳴らして口惜しがった。

「またロが痛くなってきたよ」

さんざん喋りたいだけ喋ったうえで、京珠はそういって口をつぐんだ。それから、ぼくの手の中の蜂蜜の小瓶にちらちら横目をくれながら、額に深い皺を刻むのだった。

「薬を塗らなくちゃね」

女の子はぼくより歳が三つ上だった。ぼくは嫌々ながら、残りの蜂蜜をさしだしてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.